

佐藤友祈選手 2 冠達成！おめでとうございます！ ～ 城見小学校と東京パラリンピック～



3人 みなさん初めまして。今回レポーターとして文化会館だよりのお手伝いをさせていただきました。城見小学校6年の太田悠希^{おた ゆうき}と大友神威^{おおとも かんゐ}と早川かれん^{はやかわ くれん}です。東京パラリンピックをテーマにレポートします。



早川さん 大友さん 太田さん

館長 今回の吉田文化会館だよりは、城見小学校の3人のレポーターに取材をお願いしてお送りします。この後の人権まんがにもあるように今回は障がいと人権について考えます。



太田 私たちが、東京パラリンピックに興味を持ったのは、昨年12月の人権スポーツふれあい教室からです。ここで佐藤友祈選手^{さとう ゆうき}・生馬知季選手^{いこま ともき}に講師として来ていただき、パラスポーツについて教えていただいたり、実際に車いすレースの体験をしたりしました。

人権スポーツふれあい教室で、見ているときは簡単そうだったけれど、実際にレース用の車いすに乗ってみると車輪を回すのが重たくてうまく曲がることもできなかったもので、選手の方は、すごいなと思いました。

大友 初めてパラスポーツを経験して普通のスポーツよりたくさん大変な事があると感じました。僕はサッカーをしています。どのスポーツも簡単にはできないと改めて感じました。佐藤選手はパラリンピックの出場が決まっていたのですが、生馬選手はまだ決まっていなかったのですが、出場できるといいなと思っていました。城見小学校のみんなが東京パラリンピックでの活躍を楽しみにしていたので、開催できて良かったです。東京パラリンピックに出場する選手とのふれ合いは貴重な体験でした。

大会の開催が決定してから

は、開催を心待ちにしていました。2学期の始業式がちょうど東京パラリンピックの開会式の次の日、校長先生からも話があり、絶対に応援するぞと思っていました。僕たちも何かしたいと思ってたときに応援の横断幕を作ろうという声が上がりました。城見小の代表として6年生が横断幕へのメッセージ、応援動画の撮影などを行い、2人の選手に届けました。そして、学校でもテレビ観戦などで一生懸命応援しました。



2人のレースを見て障がいを乗り越えて頑張っている姿が大勢の人達を感動させることが分かりました。人間の可能性は無限大だと思いい、本当に素晴らしいかったです。

早川 東京パラリンピックが終わってからも応援したいという気持ちで湧き上がりました。

佐藤選手は2冠達成ということで、大きな目標を達成され、次のパリでは、金メダル獲得と世界記録更新を達成すると述べていました。県民栄誉賞おめでとうございます。

東京パラリンピックや2人のレースを見て、私達もあきらめないで頑張ろうと思いました。城見小学校みんな「笑顔いっぱい 夢いっぱい どんどん挑戦 城見っ子」を合言葉に、これからも夢におかっているいろいろなことに挑戦していきたいです。

令和3年度 笠岡市人権週間のつどい

(一社) 看取り士会 会長

柴田久美子さん講演会

& 映画『みとりし』上映会

▼「ロサンゼルス日本映画祭」3冠受賞作品



日時 12月12日(日)13時30分～16時

場所 保健センター ギャラクシーホール

人間の尊厳について考える

日本では、実に約85%の人が、病院や施設で最期の時を迎えて

います。そこでは、臨終が確認されると足早に納棺の準備が始まります。それはとても無機質で、死者や家族に対する配慮に欠けている場合があります。柴田先生は、そういった状況を見かね、「看取り士」になる決断をされました。「看取り士」とは、旅立つ人と送る人との話し合いから始まり、息を引き取る瞬間とその後の時間に寄り添う人のことをいいます。最期の時を自宅で穏やかに過ごし、家族に見守られて旅立つのはもちろん、この、「死後の時間に寄り添う」ということがとても重要です。

広島へ原爆が投下されて76年となる8月6日、笠岡市中央公民館で「笠岡市原爆死没者鎮魂式並びに平和祈念のつどい」が開催されました。

式典では、「岡山龍谷高校」の生徒の皆さんが作成した「平和の誓い」を朗読して、次代を担う皆さんの平和への想いを力強く伝えていただきました。

「平和の誓い」(原文ママ)

1945年8月6日

ちようど今から76年前の8時15分。雲一つない青空の中、人類史上で初めての原子爆弾が広島に投下されました。

その熱、その温もりが残っている時間は、「神様が与えてくれたギフト」と柴田先生は言います。大切な人との最期のお別れを、ゆっくり時間をかけて過ごすことこそ、死者への本当の敬意ではないでしょうか。

その爆弾は摂氏一万度を超えた灼熱の火球となって炸裂し、その閃光と激しい爆風は、一瞬にして、そして無差別に多くの人々の命を奪いました。

後も、生き延びた人々の身体をおしほみ、心を打ちのめし、苦しみながら命を奪っていきました。

私たちは、平和学習や学校の授業で、原子爆弾が投下された後の市内や被爆された方々の様子を聞いたり、写真で見たりして学んできました。その恐ろしい光景は私たちの^{まぶた}の瞼に、そして脳裏に焼き付いています。また、私たちと同じように様々な夢や感情をもって青春時代を生き、命を絶たれた少女少女の皆さんの無念さを思うとともに、自分の夢を追いかけることができる可能性に満ち溢れた平和の有難さを感じました。

私たちは、平和学習や学校の授業で、原子爆弾が投下された後の市内や被爆された方々の様子を聞いたり、写真で見たりして学んできました。その恐ろしい光景は私たちの瞼に、そして脳裏に焼き付いています。また、私たちと同じように様々な夢や感情をもって青春時代を生き、命を絶たれた少女少女の皆さんの無念さを思うとともに、自分の夢を追いかけることができる可能性に満ち溢れた平和の有難さを感じました。

私たちだけではなく、世界には争いのない世界を作りたいと平和を望む人が多いはずですが、しかし、人間は争いをやめず、無差別に命を奪い、そして長い時をかけて人々を苦しめる核兵器を手放すことはできていません。

(中略)

一つの命は、多くの命とつながり存在しています。一人の人間が生きていくということは、その人間に関わる様々な人々の思いがその人間に注がれて、つながりが生まれていくということです。そして私たちが、今ここに

いるのも、戦争や原子爆弾で亡くなった人々を追悼するという思いによってつながってきたからだと思います。

改めて争いのない世界を作りたいという想いを強く持ち、人と人とのつながりを大切にして想いを伝え、そのつながりを家庭で、地域で、日本で、そして世界へと広げていこうと思えます。それが争いをなくすための唯一の手段だと信じて、想いを^{つないで}まいります。

どうぞこれからも見守っていただきます。



未来ちゃん

第60回 自分自身の可能性を信じて

作画 南一平

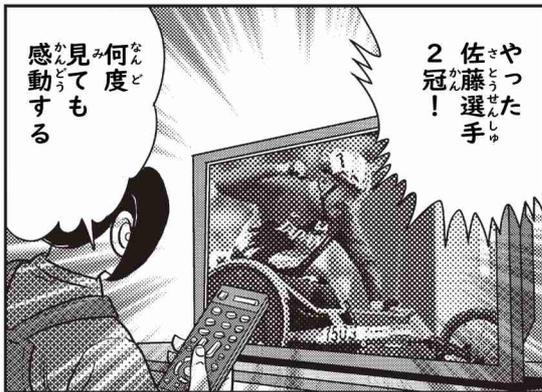
人権まんがが説

実は、金メダリストの佐藤友祈選手と笠岡はつながりがあります。昨年12月4日に城見小学校で人権ふれあいスポーツ教室を開催した際に来られたのが、佐藤友祈選手でした。スポーツ教室では、城見小の皆さんに競技用車いすの試乗の指導やデモンストレーションを行なって頂きました。その後、今年1月に所属する企業チームから独立し、プロの道を選択し、東京パラリンピックを迎えます。佐藤選手にとってプロ転向は大きな決断でした。その後、パラスポーツ全体のPRのために、大会までの残された時間をいかに使うか。また、いつ病気が進行するかわからない中で、今できる事の最大限の積み重ねが2冠という快挙に繋がったと言えます。「残された機能で出来ることを探して磨いてきた」という言葉は、私たち一人ひとりの生き方までも再考させられる言葉です。健常者が障がい者思いやるという上からの目線ではなく、その生きざまに触れ、心動かされることで、心のバリアも開かれ、真の共生社会につながるのではないのでしょうか。東京パラリンピック開催の意義は本当に大きいです。



だつて、小学校に来た人が金メダルなんてすごい

未来ちゃん
また見て
いるの



やった
佐藤選手
2冠!

何度
見ても
感動する



佐藤選手の言葉で
よかったところ
おぼえている

いっぱいあったけど
この二つかな

ぼくはもう一度
eスポーツに
チャレンジだ

そして
自分によりプレッシャーを
かけるため、会社をやめ
今年2月からプロに転身した
みんな一人一人
可能性を信じて
色々な事にチャレンジ
することに
新しい道が拓がるのでは
ないでしょうか



佐藤選手の言葉で
自分自身の道に
あてはめて
あきらめないで

もう一度
チャレンジして
みましょう



お兄ちゃん
ズルい

ただ
ゲームが
したいだけ
でしょう

えへ……

催の意義は本当に大きいです。